

事休す、楠瀬工場は閉じて仕舞った。

この時、自分は頗る剛情であった。それは以前に、英国ゴム雑誌にて、再生ゴムは技術上、配合剤として絶対必要であり、値のいかに係らず、生ゴムの四割までは、使用されるとの記事を見ていたので、今後は、自分だけで単独事業を統行することと、尼崎市の神崎駅前、友屋ゴム製造所なる小工場を建設して、再生ゴムを統行製造し、昭和七年から十三年五月まで及んだ。

このとき、たまたま東洋紡績株式会社は、かねてより自動車タイヤ、コードのメーカーであり、一方名古屋にトヨタ自動車株式会社が出現したので、トヨタの自動車用タイヤを名古屋にて製造せんとすの計画を立て、東洋紡と名古屋の代表的実業家が手を握った。ところがこのころ、漸く東亜の空は戦雲濃くなって来たため、政府は資本の新投入を認めず、工場新設は不可能となったので、ここで新設を断念し、既設工場の買収合併の方針をとった。しかし、東洋紡績では、ゴム工場経営の経験なく、適当なる担任者を有しなかったから、はじめに試験的に小工場を買収することとし、その白羽の矢は、自分の経営せる友屋ゴム製造

所に当り、又、自分もゴム経験者として入社し、同社のゴム事業建設拡大に参加することとなった。

東洋紡は第一着手に友屋ゴム製造所を資本金拾万円の内外再生ゴム株式会社に改組し、社長に名古屋商工会議所会頭神野氏の助氏、専務に東紡調査課長鷲井基之助氏、自分は取締役支配人として席末に列した。以後、既設会社を買収合併し、資本金八百万円の東洋ゴム化工株式会社となり、又合成ゴム製造の目的にて分身会社東洋合成化工株式会社を設立した。なお本来の目的である自動車タイヤ製造の促進拡大のため、神戸市のダンロップ極東ゴム株式会社の買収交渉したが、陸軍は東紡の買収よ

りも協力を希望し、東紡にてダンロップ株式の五分の一を保有し、役員を派遣することとなった。これは東洋ゴム発足後八年目のことであつた。ダンロップ合併中止を機会として社長以下役員更替し、後任社長に富久力松氏就任、社名を東洋ゴム工業株式会社と改称、数次の増資により資本金五拾五億円となり、一応、ダイヤ・メーカー四社のうちに加わることが出来た。

さて、話題は今一度再生ゴムのことに転じたい。大正六年、臨之浜の東レザ敏馬分工にて、始動した再生ゴムの作業は、鳴尾の楠瀬工場、尼崎の友屋ゴム製造所、東洋ゴムの川西再生ゴム工場、昭和十八年再生ゴム月産九十二噸と

## わが心の自叙伝 (二)

金子武蔵

この家の選定に母の意向がどれだけ盛られていたかは、今となってはたしかめようもないが、しかし結果的には母の趣味にピッタリ合ったものであったことは事実である。母はのちにせん女と号する

ホトトギス派の俳人となり、「夏草」という句集を上梓したがそこには大正五年の新年のものとして雑煮すや 潮瀬ゆるく 浜によす

引つがれて、作業を継続し、経営者は三転四転したがバトンを引き、過去五拾年、連続成長して来たのである。東洋ゴムが今日本邦二、三位のゴム会社として進出したのは、全く東洋紡の組織力、企業精神によるものであるが、しかし其間に鈴木商店伝統の「ねはり」が合流したことも否めない。

追って、自分は東洋ゴム引退後同社が創立の中国精粉工業株式会社に社長に就任、ついで昭和二十四年十二月、新法人として再出発の伊藤忠商事株式会社に入社、従来

の繊維部に対して新発足の物資部の顧問となり、在職九年、六十八才にて退社。現在は新見化学工業株式会社の会長の職に在り、かぞえ年七十六才となった。さいわい健康を感謝している。

父の故郷高知市の小学校に転じたし、またこの家では亡弟猪一(四十五年)が生まれたけれども共にまだいとけなくオモヤで母が直接世話をしていたらしく、私は多くの時を亡妹常子と子供部屋ですごし、最初、もとの住友家別邸のあたりのところであった幼稚園に通い、ついで当時は須磨寺の西南近くにあった小学校に通った。応接間についてよく覚えていたのは冬には暖炉にあかあかと火が燃えていたことである。けだし父の貧血症がようやく顕著にならんと

していたことを物語るものであつた。よく来客があつたが、当時は帝人の創成期であるから、神戸税関署に勤務していた、のちに帝人の専務となつた故業逸三氏も来客のうちに含まれていたのであらう。

この応接間に玄関があり、父の在宅するときには書生さんの一人が控えていた。父の設備欲はこの家でもムラムラと燃えあがり、母の好んだこの谷川のせせらぎは地下に消えることになつた。

家から一町半ばかり谷にそって行くと、小さいながら滝があり、その右手のガケをのぼると、そこには私どもが水源と呼んでいたものがあつた。鉄粉の峰のすそをぬって、そこには清流が流れていたが、父はこれを水道に利用した。またこの谷間がやや広くなつたあたりから家を過ぎて、四、五十間下まで、全体で二町ばかりの距離を埋め立ててしまつたので、この谷川は地下の暗キヨを流れることになつたのである。

工事が始まつたころ、タヌキがいるということで、父はその穴をトウガラシでくすべさせたが、その赤トウガラシをうまいから食えていって私に与えたところ、ただ変な顔をしただけで平然としてうま

いというので、父はその穴をトウガラシでくすべさせたが、その赤トウガラシをうまいから食えていって私に与えたところ、ただ変な顔をしただけで平然としてうま

いというので、父はその穴をトウガラシでくすべさせたが、その赤トウガラシをうまいから食えていって私に与えたところ、ただ変な顔をしただけで平然としてうま

いと答えた由である。また二町ばかりの暗キヨをローソクをたよりに学友と通り抜けたのも一再ではない。始末の悪いゴンタだったのである。

生まれて間もない子グマが贈られたことがあったが、さびしい谷

間の家の頑童は友を得たかのように狂喜した。時は梅雨のころであって、父の故郷高知からはイチゴのようなヤマモモが届いていたが、ジイヤンのスキをうかがってこれを子グマに与えた。大好物とばかり鉢にむしゃぶりつく子グマの喜びは同時に頑童の喜びであった。しかし頑童の友たることは災難でもある。家から西北二、三十間のところにかんりの池がつくら

れていたが、子グマはこの池に投げ込まれた。しかし頑童の予想を裏切って子グマは彼よりもたくみに泳ぎ、何回となく池を回ってあ

たかも水泳を楽しんでいるかのようである。これを見て頑童は手をあげ歓声を発して狂喜したのである。またこの子グマに犬の首輪をつけ、鎖でひいて海岸につれ出して水泳や魚釣りの伴をさせた。まったく人騒がせな話である。

ロバもいたのでむやみにそこらあたりを乗り回したが、クマよりは知能が少々上とみえて、うるさ

くなると、わざと木のそばを通って振り落そうとする。(ただし乗り手のいかによって手加減をするものは馬に限ったことではない。会社にも官庁にも学校にもいる)そのため生傷がたえることがない。

家から海岸に向って四、五十間の距離は、ゆるやかなが傾斜をなしていたので、工事の資材を運ぶためにトロッコが設けられていたが、ゴンタがこれを見のがすはずがない。最初は近距離運転にとどめていたが、距離はしだいに長くなり、ついにトロッコは暴走して二、三十間下のできたての大きな門を大破してしまった。

気がつく例の植込みに面した部屋に寝ており、そばには白衣の女性がいる。一時気を失い、療病院から看護婦さんがはせつけていたのであろう。

学者とか思想家とかの伝記を読むと、幼いときに父とか祖父の書だなどから、あるいは倉から書物をとりに出して、まだ読めないままに異常な興味をそそられたというようなことがよくしるされている。

しかし私の家は少し立身した番頭さんの家柄にすぎぬから、そういう機会はない。子供部屋で読本をよんだとか習字をしたとかいう記

憶もなく、ただ時折オモヤに呼び出されて、母にオサラエをしてもらっただけである。学校から帰ると、カバンを投げ出して遊びほうけていたのであろう。しかしそれでいて格別成績が悪いというわけでもないで、ご多分にもれず親バカであった両親は黙認していたことと思う。しかしその私にも今日を予示するようなことが全然なかったわけでもない。

ヤスパースは「哲学入門」において哲学的な問いは何人にもあり、したがって子供にも見出されるところとしているが、たとえば西洋の子供は、神様がこの世を創造したと教えられると、すぐ、この世が創造される以前には、なにがあったかと問い返すことが多いが、これはカントのアンチノミーの問題がすでに子供にもあることを証するというわけである。そのようなことが私にもなかったわけではない。あるとき、家のなかに、なんとなく暗い空気が漂い、母がよく泣いていたことがある。今にして思えば、兄の高知市の小学校への転学が実行に移されようとしていた時であったのであろう。私は、ひとり例の洋間の椅子にもたれて、あかあかと燃える暖炉の火を見ながら死んだのちはどうなるか

と、いつまでも、物思いに沈んでいたことをおぼえている。吹く風の、いずこより来り、いずこに去るやが、さだめがたいと同じように、我のいずこより来たり、いずこに去るやは、答えがた

い問題であるが、いまでも、それが哲学の基本的問題にはかならないと考えている。暖炉を前にした物思いは、頑童がやがて灰色の人生を、いやがうえにも灰色に描く憂愁(キルケゴール)のとりことなり、また日暮れて羽はたくミネルバのふくろう(ヘーゲル)に心を寄せはじめる前兆であらう。

暴走して門を大破したトロッコは、二の谷川を埋め立てるためのもではなかった。当時、二の谷川はすでに暗きよのうちに消え去っていたからである。このトロッコは家の西側から北側を回り、ガケの中腹にあった例の「二階」の左手にある高さ四十間ばかりの坂に設けられたレールをロクロで引き上げられて盛んに資材を運搬していた。このレールの左手につづらおりの坂があったが、これをのぼりつめると、そこは二の谷と一の谷との間にある別の谷間の始まりのところであった。この谷は深さ

三、四十間のもので、底には泉がわき、よくキジが水を飲みまきて

いた。レールが敷き始められたころ、私は、あの子グマの飼育係の春吉さんのあとをついて、こわごわ泉までくだったことがあるが、時あたかも盛夏の候で、そこいらには草木がやたらに繁茂して

いて、子供心になんともなくすごい感を受けた。父の設備癖は東西三十間ばかりのこの谷間を南方四十間ほどのところまで埋め立ててしまい、ために二の谷の山容について一の谷の山容もまた一変してしまつたのである。この谷間の北方および東方の土地は盛んに掘りくずされ、その土がまたトロッコで運搬されて谷間に投げ込まれた。そうして埋め立てによってえられた地面の南端には、城壁のように堅固な石がぎが築かれた。山容の変わりようを完成時の姿でいうと、埋め立てによってえられた土地には野菜とイモのほか、父の好物であるイチゴやスイカが栽培せられた。菜園の北の切りくずされた土地は芝生となっていて、その東北はガケの下には、かなりの池がつくられた。池の左手の石段を三、四間のほとと、趣のある松の大樹のもとにはあすまやが設けられていた。芝生の西の、やはり切りくずされた土地には猿の小屋と温室とがあり、さらにその西に

は薪など貯蔵する物置きがあった。猿小屋の右手の坂をのぼると

あずまの左手に出ることが出来たが、そこには南北に三間、東西に三、四十間ばかりの整備された土地があり、埋め立てられた土地と同じ目的に使用されていた。上段にも同じような土地があったが、ここは果樹園で、主としてモモが栽培されていた。屋敷は果樹園までで、その上には南北に二つの外人屋敷があった。

池のある芝生の東南から五、六段の石段をのぼると、東西にも南北にも三十間ばかりのやはり掘りくずしによって得られた土地があったが、ここにも芝生が植えられた。少年時代に野球に興じたなつかしい場所である。この芝生の東南は一の谷山荘につづいていたが、東に進むと倉があり、その東にはもう成人したあのクマの転居先がありその南には猿小屋、さらに門番の家があった。

あまり上等ではない門をはいると、右手にはブドウだ、左手にはかなり立派な植え込みがあり、とりわけ春の日のサクラの花と秋の夜のモクセイのかおりとはみごとであった。家はもと外人の避暑宿でもあったと思われるもので、二階建てではあるが、造作はまっ

たくお粗末というほかないものであった。

一階の東側に六畳と八畳、西側に六畳の部屋があった。中央は板の間で外人の住んでいたところの姿をとどめていた。東北のすすみは電話室であったが、その下にはセラーがあって外人はここにジャガイモやタマネギを貯蔵していたのである。板の間の南側は温室で、ランを主とする鉢植えの花が咲き乱れて、なんとなくエキゾチックな感じするのは、いかにも外人の住居らしかった。板の間の北側にはバスがあったが文字通り洋風のもので、したがってポイラーで湯をわかすようになっていた。このポイラーの東側にあるきざしをのぼると、左手はキッチン、右手はのちに建て増された和風の食堂であった。

二階には、東側に六畳と四畳半、西側に八畳と十畳の部屋があったが、下の温室にあたる場所はガラスばりの明るい応接室であった。しかしオモヤの西北には建て増した二階建てがつづいており、その上には十畳ばかりと四畳半ばかりの洋間、下には三畳と六畳との部屋があった。

温室のすぐ南にある、白い花を咲かせ、むせるような香をただよ

わせるバラのたなをくぐって、右には初夏に大輪の真白くかおり高き花をいたたく泰山木がある、そしてさらに東西に桜の若木――

移転後もなく母のサトより贈られたもの――が立ち並びきざしをくだと外人が丹精をこめて作った芝生があった。もとはローン・テニスにも興じていたのである。芝生の西北には趣のあるあずまやがあったが、あたりの茂みからは埋め立て地の石がきをかいまみることができた。この芝生からまたきざしをくだと、その花壇には外人好みの強烈な色彩の花が咲いた。

温室から西に行くと、外人の作った趣のある池、噴水、植え込みがあったが、植え込みの終わるあたりのガケの下は埋め立てによって得られた土地であった。またオモヤのすぐ西側にはゴムの木が亭々として高くそびえて清爽の感を与え、野球場のすぐ南――池のすぐ北にはフジだながあって、夏には憩いのすず風を与えてくれた。

二階の西側の二間は父母の居室であったが、父は起きている間のほとんどを、昼は明るく、晴れた日には対岸の紀州の家まで見える南向きの応接間で過ごし、ただ酷暑の候だけは、鉄拐の峰からすず

風の吹いてくる西北の洋間にいた。私は小学校時代には、一階の東側に書生さんであった小野三郎氏や橋本隆正氏らと雑居し、長じて京都市の三高に在学するようになってからは二階東側の六畳で過ごした。

一の谷山荘に移ったのがいつであったかはさだかではない。電車が塩屋まで通じたのは大正二年五月のことであるが、当時はまだ二の谷にいたことは確実であり、また父の年譜を見ると、大正生命保険会社の創立は大正二年とあり、その社長となった故金光庸夫氏との交渉が頻繁となったのは、一の谷に移ってから、移転はほぼ同年の秋ごろとみてよいかと思う。

一の谷山荘の片隅には、今日も、わびしさをたたえて亡母の面影を宿し、若くして寡婦となった末妹須磨子が住ませていただいているので、時折り訪れることもあるが、楽しかりし少年の日とは違って変わったものとなっている。変化の特に激しいのは南方と西方と西北とである。西方と西北とは今日の流行語をもってすれば、亡父が「造成」したものである。父の設備は、お嬢さん育ちの――母は父がかかってデッチ奉公していた質屋兼紙屋の娘である――おとな

しい日本趣味の母がまゆをひそめるのをよそに、いたずらに頑童を欣喜雀躍せしめつつ、たちまちにして二の谷の山谷を、ついで一の谷の山谷を一変してしまった。た

めに谷神、山神の怒りを買ったともいえるであろう。しかし造成された土地には今日多くの人々が住んでおられる。

父の設備も結果においては多くの方々に住地を与えたことになっている。楽しかりし少年の日にかえるべくもない私にとっては、ただこのことが慰めである。

両親の家に生まれて生涯そこにとどまるとか、それと同じ村や町に終身「家」をもっていかう場合のみ、心のふるさとというものもありうる。ただし内も外と相即するからである。しかるに現代人の特徴は故郷喪失（ハイマートロージツヒカイト）にあるといわれるが、私の両親は生活の本拠を喪失すること六回、私に至っては一家をかまえてから九回の多きに及び、しかもその間に一家離合の時期さえ含まれている。まことに故郷喪失の典型のようなものであって、心のふるさとなどありようはずはない。

しかしこの私にもふるさとに準ずるものがないわけではない。そ

れはしいていば須磨であり、とくに一の谷山荘である。たしかに私が常時この家に住んだのは、大正三年の秋ころから、大正六年の三月末までというごく短期間であつて、その後は高知市の小学と中学とに在学し、ついで京都の第三高等学校に、また東大文学部に学んだ。しかし昭和三年に東大を卒業するまで休暇には必ず一の谷山荘に帰省したし、ことに三高時代は土曜の夕刻に帰宅して日曜の夜ないし朝に京都に立つのをつねとっていた。だから九才から二十四才までの約十五年近くの間、この家は私にとっては生活の本拠であつたのである。

ここに移り住んでからも、私は二の谷時代と同じくひどいゴタであつた。当時ようやく用い始められたアルミの弁当箱もたされて通学したが、これには一尺ばかりヒモがついていた。帰途にはそのヒモでむやみに振り回して、木や石にぶつけるので、弁当箱は一週間の終わりにには必ずデコボコになつて役に立たなくなつてしまふ。こうも物を大切にしないようでは行く末が案ぜられると母がマユをひそめたが、その後の運命は母の心配したとおりであつた。

生まれて間もないワニの子が父

に贈られたので、一階南側の温室で水ソウに入れて飼うことになつた。珍しくてたまらず、竹でつづいてはいるうちに、つい勢がこうしてワニから血が吹き出た。あとでこわごわいくとワニは死んでい

た。 こういうことは当然わが身に返つてくる。空気銃を買つてもらつて、うれしくてたまらず、むやみにスズメやヒワやヒヨを追ひ回した。しかし、あるときタマをこめておいたことを忘れて、銃口を手のひらに当てながら、ステッキのようにして一の谷をくだつて

うちに、銃は暴発して手のひらから血が吹き出た。大騒ぎとなつて神戸の医者に連れて行かれたが、大あはれにあばれるので医者はついにカプトをぬき切開した箇所を再び縫い合わせてしまった。タマはいまでも右の人さし指と中指とがわかるあたりの肉のうちにとどまつている。医者に連れて行つてくれたのは、お人よしのジヤンである。この人は父が高知でデ

ンチ奉公していた友人か同僚であつたらしく、父に對してはかくべつ忠実であり、私に對しても特別の愛情をもつていたが、あるとき

なにかのはずみで、あまりひどく飛つたので、単純なジヤンは本

母のタミはなかなかザン健な人で、九十才を過ぎるまで動きつづけたが、目だけはひどく悪く、父の弟の楠馬さんも同様であつた。対象のしかたは多少異なつていて、もこれらの三点はそのまま私にも遺伝している。だから頭童がシ

ンから楽しからず、長ずるにしがたつて憂愁のとりことなるのは当然である。 父は連日連夜の激闘に耐えて、はなはだエネルギーではあつたが、これは、いわゆる精神的エネルギーなることであつた。だから

らすでに心身の間にアンラバンスがあつたが精神的にもやはりそうであつた。むろん父は男女の情を解しないというだけで、その他の知略・謀略に長じ、また強シンな意志力の持ちぬしであつた。それ

でも、なにか、あるアンバランスのあることをまぬがれなかつた。それが父の短所であるとともに面白さでも魅力でもあるが、一種の「狂」に近いものであつたといえ

よう。「狂」というのは、必ずしも氣遣いのことではなく、「事に熱中する態度をさし、したがって志高く進取の氣性に富むことを意味する。論語の子路篇に「狂いし

て進取」とあるはこれがためであ

る。しかし狂はまた狂過でもあつて、並みはずれた大志をいだき、並みはずれて操守にかたきことであるが、同時に中絶の道にはずれるゆえんでもある。狂とは一種のアンバランスであつて、エネルギーがなにか一事に集中的、持続的にそがれることであらうが、このような「狂」は父には性格的なものであり、したがつて生まれながらにして悲劇的な人間であつた。この「狂」は非常に弱体化された形においてはあつたが、私にも引き継がれている。

第二の原因は家庭のふんいきであつたと思ふ。私の家は少し立身した番頭の家にすぎないから、書だはななく、まして書庫などはなかつた。

しかし父は自分が正統の教育を受けえなかつたため、かえつて教育を高く評価し、偉論をさいて次々に書生を養ひ、希望するままにどこの大学でも入学させた。だから父は字間を非常に尊重したのである。不幸にして父とキンシツ相

和すること少なかつた母もこの点では父と同調。もつとも字間といつても、父の場合は実字であり、母の場合は人文主義的なものであつた。家庭では二つはゴッチャになつていた。性質上、憂愁のトリ